



今年で終戦72年。太平洋戦争末期に伝説の夜襲部隊と呼ばれた「芙蓉（ふよう）部隊」の元隊員、坪井晴隆さん（小郡市大原）が5月22日、91歳で亡くなった。

戦後も長く語ることを避けてきたが、同世代が減っていく中で、「伝えることは、生き残った私の宿命」と数年前から、講

演や取材で自らの経験で語り伝えるようになった。



生前、経験を語る坪井さん

坪井さんは現在の久留米市北野町出身。16歳の時に「空への憧れ」から自ら志願し、海軍飛行予科練習生となった。その後首都圏上空で米軍爆撃機B29を迎撃する任務に就いた。

1944（昭和19）年11月、激烈に戦局が悪化する中、司令から「後顧の憂い（あとの心配）がない者は、特攻に志願してくれ」と話があり、迷った末に願書を出しにいった。しかし、6人きょうだいの末っ子で母と2人暮らしという事情を知った上官に、涙ながらに引き留められた。（終戦後、その上官が特攻していたことを知る）

1945（昭和20）年2月、18歳で旧海軍の芙蓉部隊に加わった。このころ、特攻が主たる戦方となっていたが隊を率いた美濃部少佐は、連合艦隊司令部の作戦会議でただ一人、「全軍特攻」に異議を唱え、部隊が特攻することを拒否した。そして、より効果的に敵を攻撃する方法として夜襲作戦を訴え、坪井さんら隊員にも「俺は貴様らの特攻では絶対に殺さん！」と話していた。

夜襲作戦に向けた前代未門の訓練は過酷だった。昼に寝て、真夜中に起き出しての猛特訓。昼夜逆転の生活で、サンガラス

を着用。兵舎でも明かりをつけずに暗闇に目を慣らした。

米軍の沖縄上陸後の同年5月、本土攻撃に備え、部隊は現在の鹿児島県曾於市に急造された秘密基地に展開された。艦上爆撃機「彗星」を操縦し、米軍に奪われた飛行場を目標に夜間の奇襲攻撃を繰り返した。

「米軍が九州に上陸したら全員で敵に突っ込む」と覚悟を決めた部隊に、突然「終戦」が告げられた。1945（昭和20）年8月15日、終戦。坪井さんらに伝えられたのは、18日の夜のことであった。少佐から「あす、各自思い思いに好きなところへ飛んで行け」という話がされると、初めて陽の光に照らされた機体を前に、声を上げて泣いた。

終戦から数年後、米軍基地で働き、米兵と話す機会が増えた。ある時、夜襲隊員だったことを米兵に知られ身構えたが、米兵は「おれもそのとき沖縄にいたんだ」と笑顔で坪井さんを抱きしめた。坪井さんの中で、米軍に対するわだかまりが消えていくのが分かった。この時初めて、いかに戦争がばかかったものだったと知った。美しい故郷や家族を守りたいという思いだけで必死に戦ったが、それは敵の米兵らも同じだった。

―坪井さんを語る―

坪井 隆二さん（坪井さんの長男）

父は、以前から家族に対しては、戦争の経験を話してくれた。戦争の厳しさや悲惨さのほか「上空2,000メートルの飛行機の中は冷凍庫のようだった」と面白おかしく話してくれたこともあった。

しかし、戦友の話になると、とたんに言葉を詰まらせた。戦友が戦場から戻ってこないことが珍しくなかったが、帰ってくるかもしれないからと、晩御飯が下げられずにそのまま残してある。そんな壮絶な時代を父は生き抜いた。

戦争を経験したからこそ、とても厳しい父だったが、晩年は穏やかで優しくなった。講演などを通して人に伝えることで、父が救われた部分もあったかもしれない。

山本 寛さん（大刀洗平和記念館館長）

坪井さんは初め、公の場で戦争の経験を語ることに対して「生き残った自分だけが…」とためらっていたが、「役割を持って、仲間たちから生かされている」のはと、講演などを通して、感情を前面に出して伝えてきた。

ある講演の中で「平和。それは今日のようない日。普通の日。それが平和なんだよ。」と涙ながらに語っていたのを見て、胸にこみ上げるものがあった。

大刀洗平和記念館では、4月に「特攻」をテーマにした展示が完成した。その中で、特攻を拒否した「芙蓉部隊」を紹介している。その展示を見た坪井さんは、戦友の写真を指でなぞって喜んでいた。

石川 真理子さん（作家 著「五月の蜩」）

芙蓉部隊をテーマにした本「五月の蜩」を執筆中に、電話取材したのが坪井さんとの出会い。完成した本を読んで「ありのままに、自分たちの青春を書いてくれてありがとう。死んで戦友に会ったら『こんなにも思いを理解してくれた人がいる』と胸を張って『伝える』と喜んでくれた。それをきっかけに、坪井さんのことだけでなく、『戦友たちの遺言』を、それまで以上に心を開いて話をしてくれるようになった。

戦時中とのギャップに苦しみ、「自分だけが幸せに…」と、祭りなどには一切行かなかった。人生を謳歌しようという青年が、「故郷のため、母のため」に壮絶な時代を生きた。そのことに対し、「ありがとう」と「申し訳ない」との思いを伝え、坪井さんは「もう十分だよ」と涙ながらに語りかけてくれた。

本を書いて終わりではなく、伝え聞いた事実を、さまざまな人たちで、1人でも多くの人に「伝えること」が、自分に与えられた大きな役割だと思ふ。



艦上爆撃機「彗星」



芙蓉部隊（坪井さんは最前列左から5番目）